

南洋群島國語讀本の分析

祖 慶 壽 子

1. はじめに

「南洋群島國語讀本」は国際連盟によって日本が委任統治を任された南洋群島において日本語教育を行っていたときに作成された教科書である。本論文は使用者にとっては外国語の教科書であるこの教科書をその元となった「尋常小学校國語讀本」及び現在の小学校教科書、そして日本語教育で広く使用されている教科書との比較を行い、当時の日本語教育の状況を考えてみた。

2. 教科の名称に関して

日本語教育と国語教育の境界線は時に明瞭ではないことがある。母語話者への日本語に関する教育は「国語教育」であり、非母語話者への日本語に関する教育は「日本語教育」と呼ばれている。現在でも「日本語教育」と聞いて、国語教育のことを連想する人も少なからずいる。しかしながら、一般的には、また学問として捉える場合も、両者は前述のように区別されている。この定義にしたがえば、南洋群島における日本語教育も本来であれば、「日本語教育」でなければなかったのであるが、当時は植民地における日本語教育であったため、国語教育と称されていた。

非母語話者に対する言語教育の名称は他国においても紛らわしい部分がある。例えば、英語圏では母語話者に対する英語教育は「English」であるのに対し非母語話者に対しては「English as a second language (第二言語としての英語)」と呼ばれている。つまり全体としては異なるのであるが、どちらも「英語」と呼ばれていて、英語教育に対して「第二言語としての」と説明がついていて区別されている。言語の名前が母語話者が使用する言語、またはそれを学習する科目として使用されている「英語」に比べ、日本では母語話者への言語教育が「国語」と称されたことにより、非母語話者が使用するときには「日本語教育」と呼ぶことになり、現在においては両者には別々の名称が使用されている。

しかしながら、今日、母語話者が言語能力を向上させる際「日本語の向上」等という言葉が使用されることが多いため、「日本語教育」も、ともすれば一般には母語話者への言語教育を含める場面も見られる。本来、母語話者への教育も言語名、つまり「日本語」の呼称を使用した方が世界の言語と区別するためには良いのであろうが、両者の区別自体が時に明瞭でない現状では名称の変更は更に混乱を招くことになるため、現在の名称を継続せざるを得ない。

このように現在でも日本語教育と国語教育が混同されている状況ではあるが、当時は南洋群島の日本語教育が教科書の名称からも推察できるように、両者が同様に扱われていたのではないかと想像される。今回は使用された教科書の分析に取り組み、その実態の調査を試みた。

キーワード：国語讀本、南洋群島、日本語教育、国語教育

3. 教科書分析の目的と分析の方法

3.1 目的

本論文では当時南洋群島で学習者にとっては外国語である日本語を学ぶのに使用されていた「南洋群島國語讀本」を関連教科書とともに比較し当時の教育を他資料もあわせて分析することにより、当時の日本語教育を考えてみたいと思う。関連の教科書とは「尋常小学校國語讀本」、現在の日本語教育で最も広く使用されている教科書である「みんなの日本語初級I本冊」(スリーエーネットワーク)に、時代の変遷を把握するため現在の小学校國語教科書「こくご1上 かざぐるま」(光村図書)も加え、4種類の教科書である。

今回の分析では表記と文法に特に焦点を当てた。その理由として、テーマ等の内容に関しては既に多くの記述がなされているが、新出単語や新出の文型が教科書のページまたは課を追ってどのように配置されているか、に注目した論文が無いからである。それを明らかにすることがこの論文の役割だと考えている。従って、本稿では表記及び文法の分析はもちろん、教科書より抽出した語彙と文型自体を載せる。新出語及び文型の配置は日本語教育にとって大変重要なことであるからである。

3.2 分析方法

分析の方法は以下の通りである。教科書自体の分析(箇条書きの③)は勿論であるが実態を把握するためにも他の資料も利用した。

- ①時代背景と「南洋群島國語讀本」
- ②南洋群島における児童の日本語力に関して(学習環境も含む)
- ③教科書の比較(「南洋群島國語讀本」を現在及び当時の國語及び語教育の教科書と比較する)

3.3 分析

3.3.1 時代背景と「國語讀本」

パラオ共和国はミクロネシアにある島々からなる共和国で、16世紀から1899年にドイツの植民地になるまでスペインの植民地であった。第一次世界大戦の混乱の中日本が太平洋の独領のミクロネシアを国際連盟により委任統治として占領し、第二次世界大戦にアメリカ合衆国を中心とする連合国に敗戦に追い込まれるまで日本人が多数住んでいた。日本は1914年8月に日英同盟に基づき第一次世界大戦に参戦し、ミクロネシアの地域に進出していた。占領当初より軍人により教育が試行され、1915年には現地に教育制度を布くために文部省より法学博士の石黒英彦が派遣された。同年12月「南洋群島小学校規則」が布かれた、1916年にはパラオ島マルキヨク小学科校が設置、1917年には日本人教師により日本語教育が開始された。本論文では南洋群島の教科書として芦田恵之助の編纂による「本科用 南洋群島『國語讀本』第一巻」と「南洋群島國語讀本教授書」を分析する。また、比較のため他の教科書も使用する。(後述)

3.3.2 児童の日本語能力に関して

南洋群島では日本人児童生徒と現地の児童生徒はそれぞれ別の学校に通っていた。日本人は小学

校に通ったが現地の児童生徒は公学校に通った。従って現地の生徒は外国人であるがための不利な状況にはなく、1年次には非母語話者への配慮も有ったそうである。しかしながら、2年次からは日本語だけの授業であったようだ。そのことは筆者の2015年の調査でも確認している。また、ロングの「マリアナ諸島に残存する日本語—その中間言語的特徴」の中にも関連の記述がある。

南洋群島の児童が学校教育を受ける段階においてどの程度日本語の能力があったかに関しては次の2つの文献により推測する。森岡（2005）によると1年（地域によって3年まで）のときにはパラオ人の通訳がいたという。児童の日本語力にはかなり差があり、居住環境により日本語会話が可能な児童とそうでない児童がいたという。芦田の「南洋群島国語読本教授書」の記述では「南洋群島において児童は国語の一語を解せず、一字をも知らないのですから……」とあった。このことから「国語読本」は外国語としての日本語教育の教科書として使用されていたことが分かる。

以上のことから1年次において通訳を交えて日本本土と類似の「国語読本」を使用しながらもある程度の基礎を築くことにより、2年次からは本格的な直接法により、やはり母語話者の使用する「国語読本」とあまり差のない教科書を使用していたようだ。もっとも、クラスは全員非母語話者のみであるので、通訳はないとしても日本語学習者への対応は可能であっただろう。

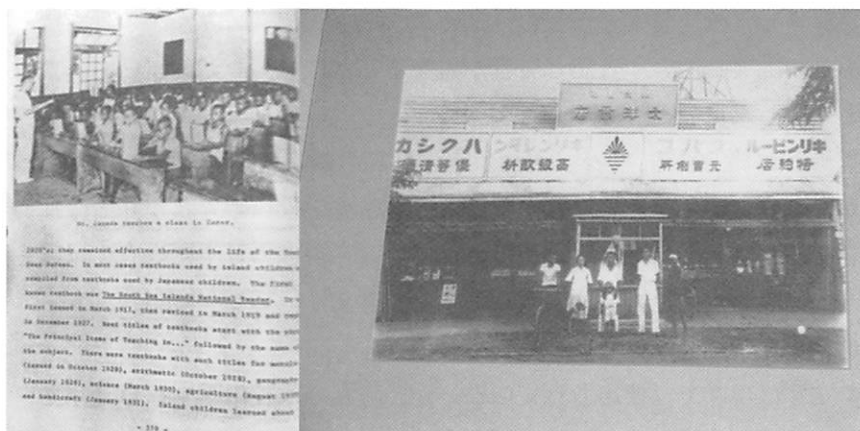


図1（「History of Palau」より当時の授業風景（左）、博物館資料より町の風景（右））

3.3.3 教科書の比較

宮脇（2006）によると「南洋群島国語読本」は日本本土で使用されている教科書からの転写も多いが、南洋群島独自のものがあるという。その点は非母語話者への配慮もあると言える。第一次編纂（杉田次平）による1917年出版の讀本では天皇制国家を強調していたのに対し、1925年出版の第二次編纂（芦田）の場合は島民の生活に配慮していると言う。言語面に関する筆者の分析によると、最も注目すべきは文法に関してで、上記の両教科書は第二言語学習用教科書としては文法の観点からの考慮が全くなされていない点である。もちろん教科書の巻一の最初は簡単な単語で始まり、次に簡単な文、そして徐々に長文になるというように易から難になっていて、それにつれ文法面でも単純な形から複雑になっている。その点では考慮がなされている。しかしながらそれは母語話者使用の教科書においても同様の形態を取っているため、特に非母語話者へ配慮があるとは言えないが、扱う内容、ひいては導入されている単語自体には島内の身近な事物があげられている点では配慮があると言える。このように「南洋群島国語読本」は現地児童にとってみれば外国語としての日

本語を学ぶ教科書であり現地児童への配慮も多少あるが、特に文法面では使用し辛いものであったであろう。

(1) 表記

「南洋群島國語読本」2冊と「尋常小学読本」2冊、現在日本人児童が使用している国語の教科書「こくご一上 かざぐるま」、それに加え多くの日本語学習者が使用している「みんなのほんご初級本冊1」を比較した。その結果は以下の通りで、具体例を挙げた表を表1に掲載する。

1) 讀本では片仮名がまず導入されている。それは日本本土で使用されていた教科書もまた同様であり、現在の小学校の国語の教科書や日本語学習者用教科書（例えば「みんなのほんご」と異なるところである。

2) 表記法が現在と異なっている。例えば、分かち書きで、助詞は前後の言葉から独立して書かれている。現在では、その直前の語に連続して書かれる。

3) 讀本では段落が変わった際、行替えし、文頭にはスペースが無いのに対し国語教育でも日本語教育でもスペースを空けている。

讀本の場合、助詞の表記が現在と異なる。この点は南洋群島の讀本は助詞の「は」は「ワ」と記述されているが尋常小学校用讀本と現在の「こくご一上」でも「みんなの日本語」でも「ハ」または「は」であるのは興味深い。表記と発音が異なることに対し、非母語話者にとっては理解が困難ではないかと考慮した可能性がある。

また、助詞「へ」に関しても、「ハ」同様、南洋群島の讀本においては、「エ」を使用していて、学習者に考慮がなされているとみることができる。尋常小学校用讀本と現在の「こくご一上」でも「みんなの日本語」ではともに「へ」が使用されている。現在の日本語教育では学習者への一時的な配慮より、今後一般の日本語の文章に触れることを考え、「へ」を使用していると考えられる。

5) 現在では使用されていない文字の使用

「キ」「エ」の文字は現在では使用されていないが、尋常小学校用讀本には使用されているが、南洋群島の讀本には使用されていず、「イ」と「エ」で書かれている。また、「こくご一上」でも「みんなの日本語」でも「イ」と「エ」である。

6) 旧仮名遣い

尋常小学校用讀本では「アライ」のように旧仮名遣いであるが、南洋群島用の讀本では「アオ」となっている。前者では「カハ」であるが後者では「カワ」と記述されている。このように南洋群島用の讀本では戦後の仮名遣いと同様になっている。

(2) 内容

1) 単語

現在では使用されていない語がある。例えば「カワイウ」は「ゴザイマス」の前に使用され「カワイウ ゴザイマス」となっているが、現在では「かわいいです」と表現されるであろう。

上記の単語は仮名遣い、あるいは発音の問題とも取れるものであるが、「シシ」などの言葉は現在では外来語の「ライオン」が使用されるのが普通であろう。

「カガト」や「トボス」等の言葉は発音の揺れであったかもしれないが、現在では「かかと」や「と

もす」と表記される場所である。

2) 取り上げるテーマ

この点に関しては監修者の宮脇も述べているように学習者に多少の配慮がなされている。例えば、「イエ」に関する挿絵は日本の家屋とともに現地の家も描かれている。また、「パンノミ」や「ヤシノキ」など、現地の植物も多く取り上げられている。海の話題も多いのも特徴の一つである。このようにテーマに関しては学習者に配慮がなされているが、多くの記述が見られるので本稿では分析の対象としない。

(3) 文法に関して

文法に関しては南洋群島用の國語讀本には非母語話者への配慮は殆どなされておらず、尋常小学校（あるいはその他類似の教科書）の単語から短文へ、短文から長文への形式に倣っているのみである。この点で「南洋群島國語讀本」は不十分であると言える。それが教科書として成立できていたのは、通訳の存在と植民地での学校教育で使用されていたことによる。宮脇もその解説書において同様の指摘をしている。「外国語・第二言語教育用の教科書はイデオロギーより、語彙、句型、文法の提示・応用に配慮しながら作成されるはずのものであるが、当時には「外国語・第二言語としての日本語教育の研究も教材開発も十分ではなかったからである。」(p.26)と述べている。

今回は現在日本語の教科書として広く使用されている「みんなの日本語」における文法を紹介する。日本語の教科書は易から難へ展開されているのは勿論、項目ごとの関連にも配慮がなされている。例えば、南洋群島用（第一次）では「単語」から「形容詞との組み合わせ」へ、形容詞と形容動詞への注目を経て、すぐに「アリマス」が導入されている。次ページには「イマス」が出現しているのであるが、存在の「イマス」ではなく、「補助動詞」の「イイマス」が導入されている。具体的に取り上げると、「アリマス」の場合は「ホン ガ アリマス」に続いて同様の文章が2文あり、次ページの「イマス」では「トンボ ガ トンデ イマス。」となっている。この場合、適当な文としては「オトコ ノ ヒト ガ イマス」等の存在を表す文の方が適当であろう。その後、しかるべきところにて本動詞を補助する形で「トンデ イマス」等の補助動詞を紹介するのが出題順としては無理が無い。

第二次版においても単語の紹介後、まず導入されているのは単語と単語を結ぶ助詞の「ノ」とともに同文で目的を表す助詞の「ニ」で文を終えている。つまり、「ハナ ノ ミツ スイ ニ。」となっている。しかも「スイ ニ」の前は助詞の「ヲ」が省略した形となっている。「ヲ」の入っている方が基本形なのである。

社会的な要因も考えられるが、南洋群島用と尋常小学校用では敬語が早い段階で導入されている。日本語教育の場合は初級Ⅰの教科書では敬語は紹介されていない。初級Ⅱでもほとんど最後の方である。文法項目の順序はそれぞれの教科書の語彙表に解説として載せてある。

文法に関する注目すべき項目は「数字」「時間の表現」「自動詞」「往来表現」「他動詞」「目的語を必要とする動詞」「授受表現」「2つの目的を必要とする動詞」「い形容詞（国語教育では形容詞）」「な形容詞（国語教育では（形容動詞））」「存在を表す動詞」「数助詞」「比較の表現」「継続動詞＋います」「て形」「許可の表現（～でもいいです）」「禁止の表現（～てはいけません）」「瞬間動詞＋います習慣を表す表現（～ています）」「従属節を導く「から」（～てから）」「ない形」「禁止の表現

(～ないでください)」「義務の表現(～なければなりません)」「容認の表現(～なくてもいいです)」「た形」「普通体」「可能の表現」「従属節」等の表現で、特に「て形」や「ない形」などは関連の文法事項がまとめられている。今回分析した教科書の一部を表1～3に表す。

4. 分析結果

分析の結果を次頁に示す。今回前頁を分析したのは表1～3の教科書5冊であるが、比較のため、その前後の教科書3冊の特徴の分析も含めて表を作製した。教科書に見られる表記の違いに関しては昭和21年内閣告示第33号「現代かなづかい」をはじめ度重なる表記に関する国の方針の変更が主な原因であるが、国語の教科書が同時代に作成された日本国内用と海外用とでは異なる点は注目し値する。その点からみると、海外で使用される教科書においては現地の学習者に対する配慮がみられる。これは戦後の新しい仮名遣いを戦後を待たずに実施している感があり、大変興味深い。

表1 新出単語の分析 尋常小学校国語読本 大正6年(1917年)

1	ハナ	
2	ハト、マメ、マス	
3	ミノ、カサ、カラカサ	
4	カラス、ガ、キマス、スズメ、	キル(存在をあらわす動詞、旧仮名)
5	ウシ、ト	ト(並列を表す助詞)
6	ハサミ、アリマス、モノサシ、ヒノシ	アル(存在をあらわす動詞、旧仮名) 道具の名
7	オミヤ、オテラ、ヤクバ	施設の名
8	イヌ、シロイ、クロイ、	形容詞
9	オヤネコ、コネコ、ニヒキ	助数詞
10	サル、カキ、ノ、タネ、ヲ カニ、ニ、ヤリマシタ ニギリメシ、	ノ(助詞)、ヤリマシタ(過去形、授受表現) ヲ(助詞)
11	ハヤク、メ、ダセ、ダサヌ、ハサミ、デ、ハサミキル	副詞、ダセ(命令形)、ハサミキルデ(手段を表す助詞)
12	ニ、ナレ、ナラヌ、	ニ(助詞)ヌ(否定の助詞)
13	ミツケル、トル、アライノ、ナグツケル	
14		
15	シヌ、コガニ、ナク、～テキル、ハチ、クル、～テ、ワケ、タヅネル	～テキル(進行をあらわすアスペクト表現)、～テ(運用止め、動詞の並列)
16	キク、モ、オコル、クリ、ウス	～テ(理由を表す)、
17	カタキウチ、コトニナルトビツク、ヤケド	コトニナル(形式名詞+になる)
18	ミヅ、ツケル、～ニイク ～ト、チクリ、サス、ニゲル	～ニイク(目的を表す「に」)、～ト(条件節)
19	オチル、～テクル、オシツケル、	
20	アメ、ヤム、テル、スズシイ、フク、ヨイ、ココロモチ、デス	
21	デンデンムシムシ、カタツマリ、アタマ、カ、メ、ツノ、ダセ、ヤリ、	ダセ(命令形)

表2 新出単語の分析 南洋群島国語読本(1917年)

頁	新出単語	特記事項
1	ハタ	進出カナ「ハ」「タ」
2	ハナ、トリ	「ナ」「ト」「リ」
3	ヒト	「ヒ」
4	テ、アシ	「テ」「ア」「シ」
5	イエ	「イ」「エ」
6	イス、ツクエ	「ス」「ツ」「ク」
7	(絵のみ)	
8	アサヒ、ウミ	「サ」「ウ」「ミ」
9	フネ	「フ」「ネ」
10	サカナ、カメ、カニ	「カ」「メ」「ニ」
11	エビ、タコ、サンゴ	「ヒ」「コ」「ン」「ゴ」
12	パン、ノ、ミ、ヤシ、キ	～ノ(「～の」所有)「バ」「ノ」「ヤ」「キ」
13	ヤギ、ト、ブタ、コ	ト(並列を表す助詞)「ギ」「ブ」
14	キモノ、オビ、クシ、カガミ	「モ」「オ」「ガ」
15	(絵のみ)	
16	ニ、ホ、ホバシラ	ニ(場所を表す助詞)「ホ」「バ」「ラ」
17	ハシラ、トケイ、ナガイ、ハリ、ミジカイ、	形容詞(イ形容詞)「ケ」「ジ」
18	キク、(ゴ)モン、キリ	接頭語(敬語)
19	シロイ、スナ、アオイ、ウミ	色を表す形容詞(イ形容詞)「ロ」
20	キレイナ、ミズ、キタナイ	ナ形容詞「レ」「ツ」
21	ホン、アル、ガ、エンビツ、ランプ	～ガアル(存在を表す表現) 主格を表すガ「マ」「ビ」「ブ」
22	トンボ、トブ、～テイル、ムシ、ナク	～テイル(動作の進行を表す) 「ボ」「デ」「ム」
23	(絵のみ)	
24	ネコ、ラ、ダク、イス、ツレル	ヲ(動作の対処を表す)「ヲ」(進出カナ) 「ダ」「ヌ」
25	ニジ、デル、キレイ ゴザル、アカ、アオ、キ ムラサキ	ゴザル(敬語 丁重体)「ザ」
26	カイガン、ヤシ、キ	位置の表現

杉田次平(守備隊司令部付教育主任) 臨時南洋群島防備隊司令部

表3 新出単語の分析 尋常小学校国語読本②第二次 1925年(大正14年)

頁	新出語	特記事項
2	ハナ	単語(ハナ。)文字の導入
3	アカイ	形容詞+名詞(アカイ ハナ)
4	ナミ	
5	カミ、スミ、スズリ	
6	コイヌ	複合語、の導入
7	ウシ、オヤウシ	
8	イシ、カミ、ハサミ	
9	ホン、アナタ、ノ、 ワタクシ	所有の助詞、人称代名詞、分ち書き
10	ケイコ、カネ、ヤスミ カン カン、カン	擬声語
11	オハヨウ、コンニチ ワ サヨウナラ	挨拶の語、助詞のワ
12	ヘイタイ、サン、ボウシ クツ	敬称(サン)
13	ケン、テッポウ、ラッパ	単語、文字の導入
14	ベニスズメ、ミツ、 スウ(スイニ)、ニ アマイ、ミツ、スウ	動詞、目的を表すニ 連用修飾節のみの文 (ハナ ノ ミツ スイ ニ)
15	テ、ト、ヲ、 ツナグ(ツナイデ) マンマルク	助詞ト、動詞の連用形、副詞
16	ヒノデ、ヒノイリ、ナミ ガ、ヒカル、マッカニ キラキラ	助詞ガ
17	アダマ、カオ、マユ、メ ヒゲ、クチ、ハ、シタ クビ、ノド、カタ、ウデ テ、ユビ、ツメ、ムネ、 チチ、ハラ、セナカ、コシ シリ、モモ、ヒザ、スネ アシ、カガト	
18	キモノ、ソデ、エリ、スソ	

芦田恵之助(文部省図書編 官) 南洋庁

表4 新出単語の分析 小学校「こくご」教科書 2010年(平成22年)

ページ	新出語	特記事項
1	せんせい、あわせて、あかるい こえで、はる、はるの はな、さいた、あさの、ひかり、きらきら、みんな、ともだち、いちねんせい	文字の導入、単語、句、詩、文章、過去形、作者名、形容詞、擬声語、挨拶、方法を表す助詞(で)
2	はる	(学校の絵)
3		(学校の絵)
4		(教室の絵)
5		(教室の絵)
6	おはよう	(子供達の絵)
7	おはよう	(子供達の絵)
8	あかるい、こえで	(子供達の絵)
9		(子供達の絵)
10	どうぞ よろしく	(字を書いている絵)
11	いちねん	字の書き方(方眼紙)
12	おはなし よんで	絵本、連用形止め(くださいの省略)
13	だいくと おにろく、キャベツくん、バナナ、これは のみの びこ、おおきく なるって いうことは	絵本のタイトル、文章、カタカナ
14	うたに あわせて あいうえお、あかるい あさだ、あいうえお	文章、形容詞、「あ」の紹介、助詞の「に」
15	いいこと、いろいろ、うたごえ、うきうき、	「い、う」の紹介
16	えがお、えんそく	「え」の紹介
17	おいしい、おむすび	「お」の紹介
18		あ行の書き方(方眼紙)
19	あり、いか、うし、えき、おに	単語と絵を結ばせる、単語の書き方(方眼紙)
20	ふたりで おはなし	
21	なにが いますか、さるが います、どこに いますか きの うえに います	文章、質問文とその答え、疑問詞、存在文主格を表す助詞(が)

表5 新出単語の分析 日本語教育の教科書「みんなの日本語」1988年(平成10年)

課	新出語	特記事項
1課	わたし、わたしたち、あなた、あのひと(あのかた)あの人 みなさん(皆さん)～さん、～ちゃん、～くん、～じん、せんせい、 きょうし、がくせい、しゃしん、ぎんこういん、いしゃ、エンジニア、けんきゅうしゃ、だいがく、びょういん、でんき、だれ(どなた)、～さい、なんさい(おいくつ) はい、いいえ、しつれいですが、 おなまえは?はじめまして、どうぞよろしく、こちらは～さんです、～からきました。	職業の紹介、自己紹介、出身、年、挨拶 国名、会社名の例
2課	これ、それ、あれ、この～、その～、あの～ ほん、じしよ、ざつし、しんぶん、ノート てちょう、めいし、カード、テレホンカード えんぴつ、ボールペン、シャープペンシル かぎ、とけい、かさ、かばん、(カセット)テープ、テレビ、ラジオ、カメラ、コンピューター、じどうしゃ、つくえ、いす、チョコレート コーヒー、えいご、にほんご、～ご、なん、そう、ちがいます。、そうですか。、あもう ほんのきもちです。どうぞ。[どうも]ありがとう [ございます]。これから おせわになります。こちらこそ よろしく。	代名詞 文房具、電化製品、感謝の気持ち伝える表現、言語の名前、相槌
3課	ここ、そこ、あそこ、どこ、こちら、あちら、どちら、きょうしつ、しょくどう、じむしょ、かいぎしつ、うけつけ、ロビー、へや、トイレ(おてあらい)、かいだん、エレベーター、エスカレーター、(お)くに、かいしゃ、うち、でんわ、くつ、ネクタイ、ワイン、たばこ、うりば、ちか、～かい(～がい)、～えん、いくら、ひやく、せん、まん、すみません、～でございませう。～をみせてください。じゃ、～をください。	場所を示す代名詞 場所を表す語彙 デパートの品 数字 買い物で使用する表現
4課	起きます、寝ます、働きます、休みます、勉強し	自動詞、公共の施設、時間の

表6 教科書の比較のまとめ

尋常小学國語讀本 卷一 (大正6年)	分かち書きカタカナ本文, 旧仮名(キ, エ), 助詞の独立, 助詞「へ」「ハ」, 旧表記(ウへ)大文字促音, 巻中に旧仮名含む五十音表あり, 段落換え時のインデント無
尋常小学國語讀本 (大正10年) 卷二	分かち書きカタカナ本文, 旧仮名(キ, エ), 助詞の独立, 旧発音の表記(ウンドウクワイ), 大文字旧仮名遣い拗音(一シヤウケンメイ), 段落換え時のインデント無
南洋群島國語讀本(大正6年) 卷一	分かち書きカタカナ本文, 本文中旧仮名無し, 巻末に旧仮名含む五十音表あり, 小文字促音, チ及びツの濁音を含む語, 助詞の独立, 助詞「ワ」, 段落換え時のインデント無
南洋群島國語讀本(大正14年) 卷一	分かち書きカタカナ本文, 本文中旧仮名無し, 巻頭にカッコ付旧仮名含む表あり, 小文字促音, 小文字拗音, チ及びツの濁音を含む語, 助詞の独立, 段落換え時のインデント無
南洋群島國語讀本(大正6年) 卷二	分かち書きカタカナ本文, 本文中旧仮名無し, 小文字拗音, 小文字促音, 助詞の独立, 助詞「ワ」「エ」, 段落換え時のインデント無
南洋群島國語讀本(大正14年) 卷二	分かち書きカタカナ本文, 本文中旧仮名無し, 小文字拗音, 小文字促音, 助詞の独立, 助詞「ワ」「エ」, 新発音表記(ウンドウカイ) 段落換え時のインデント無
国語 一上(光村図書)	分かち書きひらがな本文, 小文字促音, 小文字拗音, 後接助詞「は」「へ」, 新仮名遣い, 段落換え時のインデント有
みんなのにはんご 初級I	分かち書きひらがな本文, 小文字促音, 小文字拗音, 後接助詞「は」「へ」, 新仮名遣い, 段落換え時のインデント有

7. まとめ

今回の戦前戦後の「こくご」の教科書とそれに加え海外で使用されていた日本語教育の教科書を分析することにより, 日本の言語教育に対する考え方とその変化をより一層具体的に把握することができた。また, 表記法に関しても日本国内よりも先に海外において改革が進んでいたことが今回の分析により確認することができた。

参考文献

- 芦田芦田恵之助 1925「南洋群島 國語讀本 卷一」南洋庁
 芦田芦田恵之助 1925「南洋群島 國語讀本 教授書」南洋庁
 杉田次平 1917「南洋群島 國語讀本 卷一」臨時南洋群島防備隊司令部
 スリーエーネットワーク 2012「みんなのにはんご初級本冊1 第2版」スリーエーネットワーク
 ダニエル・ロング他 2012「マリアナ諸島に残存する日本語—その中間言語的特徴—」明治書院
 古田東朔 1984「小学讀本便覧第7巻」武蔵野書院
 光村図書出版株式会社編集部 2010「こくご一上 かざぐるま」光村図書出版
 宮脇弘幸 2006「解説 南洋教育と『國語讀本』」『南洋群島 國語讀本 第一巻』大空出版社
 宮脇弘幸 2006「南洋群島 國語讀本 第一巻, 第二巻, 第八巻」大空出版社
 森岡純子 2005「パラオにおける戦前日本語教育とその影響—戦前日本語教育を受けたパラオ人の聞きとり調査から—」『山口 幸二教授退職記念論文集ことばとそのひろがり(4)』立命館法学別冊, 立命館大学法学会
 文部省編 1917「尋常小学國語讀本卷一」文部省
 文部省編 1926「尋常小学國語讀本卷二」文部省